

がんばれ「沖縄農林水産業」



平野 昭
(前沖縄総合事務局農林水産部長)

私は、平成9年4月から平成10年12月までの間、沖縄総合事務局農林水産部長として沖縄の農林水産業の仕事を担当させていただいた。この間、総合事務局はもとより、沖縄県、市町村、農協等関係者の皆様のご配慮、ご協力により、短い間ではあったが沖縄について多くのことを学ぶことができた。お世話になった方々に心から感謝を申し上げます。東京の新しい職場に赴任する日の午前、これまで何度も訪れている那覇の国際通りの「わしたショップ」に足を向けた。「わしたショップ」のフロアの半分以上は農林畜産品や食料品である。様々な黒糖製品やゴーヤ等野菜、果実、花、水産物など、陳列されているそれぞれの産品を手にとってみると、沖縄に在任中訪れた県内各地の離島や産地の人々のことが懐かしく思い出された。

これらの品々は沖縄の気候、風土、文化の中で農家等の努力によって生産されたものであり、いずれも「沖縄」がその中に凝縮されているように思える。黒糖はさとうきびを煮詰めて製造されるが、沖縄では約600年の歴史があり、その生産、収穫を通じて沖縄の島々の文化や風土を育んできた。長い間にわたり、さとうきび生産と製糖事業は数少ない沖縄の移出産業であり、人々の生活や経済を支えてきた。さとうきびは本土の稲作にも匹敵する基幹作物である。また、てびち、らふてい等豚肉食品は沖縄における食生活の貴重な蛋白源であるし、ゴーヤーやへちまは夏場の貴重な野菜であった。これらの生産が沖縄の伝統的な食文化を形成してきた。

沖縄にとって農林水産業とは何か

と問われれば、私は、それは沖縄にとっての「三線」、「沖縄方言」のような存在ではないかと思う。沖縄独特の亜熱帯気候の下において、歴史と風土と文化に包まれ、島々の人々の生活・生産活動の結果として生み出されてくるものであり、沖縄ならではの、固有の魅力が凝縮されていると思えるからである。

ひるがえって、現在の沖縄農林水産業についてみれば、就業者の高齢化や減少、農地の転用や改廃、粗生産額の頭打ちないし減少等がみられ、特に、さとうきび生産については、十年以上も減少傾向が続いており、地域の製糖工場にとっては厳しい状況となっている。しかし、沖縄は我が国で唯一の亜熱帯地域である。巨大な購買力のある日本本土市場に近接しており、将来的には中国市場等への輸出の可能性もあること等から、今日的な意味で「地理的優位性」に恵まれているといえる。沖縄の特色を生かした産地づくりに必要な生産技術や供給体制が確立されれば、沖縄の農林水産業には大きな可能性があると考えられる。重要なことは、この可能性を現実のものとしていく、いわゆる「ソフト」を如何にして沖縄の農林水産業関係者が獲得していくにかかっていることである。

このためには、例えば、すいかやばれいしょ、小菊など、産地形成が進んでいる地域の産地づくりの経験や反省、ノウハウ等を一つ一つ検証・蓄積し、その知識の普及・活用を図ることによって、ステップ・バイ・ステップで沖縄型の産地の形成・拡大を図っていくことも必要ではないか。私は、沖縄県内各地の農業者、漁業者等、多くの方々にお会いし、日夜、生産・販売に懸命に取り組んでいる姿を拝見し、知恵や工夫をお聞きする中で、現状は厳しいながらも将来に希望を持つことができた。農林水産業は知識集約型産業であってこそ展望が開ける。農林水産業の将来については厳しい見方もあるが、今こそ、関係者が希望を持ち、自身を持って取り組むことが必要である。これらの人々が創意工夫を発揮し力強く努力する限り沖縄の農林水産業の未来は輝いていると確信している。

農林水産部長に 宮本敏久氏が就任。



平野前部長の転任に伴い、平成11年1月6日付けで農林水産部長宮本敏久氏が就任した。

昭和52年東京大学法学部卒業。同年農林水産省入省、昭和61年九州農政局企画調整室企画官、平成4年近畿農政局企画調整室長、平成6年構造改善局計画部地域計画課農村整備・活性化対策室長、平成7年構造改善局農政部就業改善課中山間地域活性化推進室長、平成9年経済局統計情報部企画調整課地域・環境情報室長を歴任後現在に至る。

富山県出身、44歳